京都橘大学女性歴史文化研究所　第二九回シンポジウム
「考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族」Ⅱ

古墳時代の家族・ジェンダー
――近畿地域の事例を中心として――

中久保辰夫

みなさん、こんにちは。京都橘大学文学部歴史遺産学科におります、中久保と申します。

私は、日本列島の近畿地域を中心に古墳を研究しています。先ほども縄文時代のお墓が出てきましたが、日本にはさまざまなお墓があって、大きなものでは五〇〇ｍくらい、小さなものでは一〇ｍもないような古墳が、南東北から南九州まで直線距離にして一三〇〇㎞を超えて築造された時代のことを学んでいます。

じつは昨日まで古墳の発掘をしていました。ようやく調査の一区切りを終えて、昨日はその片付けを一生懸命していました。これが私の日常生活です。

きょうは「古墳時代の家族・ジェンダー」と題しまして、お話をします。古墳時代は、古墳が築造された西暦三世紀半ばから概ね七世紀の三五〇年間続いた時代を指します。縄文時代の一万年と比べると非常に短いですが、人類史の中で見ると、大小さまざまな墳丘墓が三五〇年間造られ続けたのは非常に珍しいということもあります。きょうは、二〇一九年に世界文化遺産に登録された百舌鳥・古市古墳群のことにも少しふれつつ、特に家族とジェンダーに注目しながらお話をさせていただこうと思っています。

きょうのお話は三つです。一つは古墳時代をいろいろな角度からみるために、近代化以前の社会において、「男性と女性、もしくはいろいろな性の人びとが、どのように仕事の分担をしていたのか」という研究が人類学や考古学で行われていますので、それをご紹介いたします。

二つめの話は、日本では少ないのですが古墳から人骨が出ることがありまして、そうした人骨の調査でわかってきたことなどをご紹介い

たします。

三つめは、ごく最近研究され始めたことでもあるのですが、「ジェンダーの視点で埴輪から何が読み解けるか」という話です。歴史遺産学科の学生は、大阪府高槻市にある今城塚古墳で埴輪づくり体験をします。粘土を用意してもらって、学生が思い思いに埴輪をつくるのですが、最初に埴輪とはどういうものかを説明しないと、土偶にしかみえないものができあがってきます。それで「埴輪と土偶は違う」という話になるのですが、埴輪には非常におもしろい側面もあります。ジェンダーの観点で埴輪を読み解くと何がわかってくるのかについて、少し挑戦的な内容になりますがお話をしたいと思います。

近年、『性差(ジェンダー)の日本史』〈インターナショナル新書〉(国立歴史民俗博物館監修、集英社インターナショナル、二〇二一年)という本が出版されました。千葉の国立歴史民俗博物館が、二〇二〇年に「性差(ジェンダー)の日本史」という展示をされました。非常に注目を集め、来館者も多く、図録が増刷になるほどで、多様な年代の方が注目し、展示の見学に訪れました。

「日本の歴史」という言い方がいいのかどうかという問題はありますが、日本列島のさまざまに変転した歴史の中で、男性と女性―このような分け方自体が議論の対象になるかと思いますが―という社会的な性別の差がどのように出てきたか、それが時代性をどのように帯びているのか、ということを通史的にみようという関心が広まってきたのではないかと思っています。

ジェンダーの問題は、ともすれば現代の問題のように思われがちです。しかし、われわれ先史時代の研究をしている者からすると、それこそ一万年を遡る非常に長い歴史の流れの中でこうした問題を考える必要を感じます。文字もない古い時代のことが参考になることがあると信じるからです。

ただ、日本でいえば、飛鳥・奈良時代より前には、文字史料はほとんどありませんし、その時代の絵が描かれたものもありませんので、想像に頼るしかないところは出てきます。考古学の分野でも、ジェンダー考古学という分野もありまして、さまざまな角度から研究されていますが、なかでも特に議論の対象になっているのは博物館の展示や教科書・概説書等の挿絵です。絵を描くとき、男女の描き分けが必要な場面があって、現代の価値観やジェンダー規範で過去を投影しているのではないかという批判があります。

たとえば、韓国のソウルにある漢城百済博物館の展示です。古墳時代の頃、朝鮮半島では高句麗・新羅・百済・加耶諸国という政体が覇を競っていました。この時代は「三国時代」と呼ばれ、百済の王都である漢城は現在のソウルにありました。夢村土城はオリンピック公園内にあって、そこで百済の時代の生活を復元した展示をしているのが漢城百済博物館です。その展示を見ると、奥のほうの厨房に女性が立っていて、男性が外から帰ってきているという場面を描いたイラストがあります。これが本当にそうなのかということですね。

また、アメリカ先住民の非常に興味深い遺跡で、Cahokiaという大きなマウンドがある遺跡があります。これも世界遺産になっているの

ですが、ここのジオラマなどで復元されているのを見ると、トウモロコシを採って、それを磨石ですりつぶしているのは女性というかたちで描かれています。

こうしたものは、いろいろな議論になって、本当にそれでいいのかということもありますが、疑問点を批判的に考えていくことが大切になってくるわけです。

そのなかで、非常に古い仕事になりますが、研究の出発点として大きな意味を持ったのは、マードックという方がおこなった性別分業論です(Murdock, G. P., "Comparative data on the division of labor by sex", *Social Forces*, 15, 1937, pp. 551–553)。これは世界各地の二二四の種族の民族誌をもとに、四六種の労働について男女のどちらが主体的に携わっているのか、その比率を調べた研究です。

もちろん、これは一九三七年の調査ですので、まだ女性史という分野が世界の中でも確立していなかった時期と私は整理していますし、「その当時のジェンダーバイアスがかかっているのではないか」という視点でもう一度見直す必要があるかもしれませんが、非常に貴重なデータだと思っています。

二二四の種族というのは近代化していない事例ということで、F(女性が主体の仕事)、F⁻(女性が主体だけれども男性がけっこう手伝っている仕事)、–(ニュートラル。男女どちらも参加する労働)、M⁻(男性が主体で女性が手伝う仕事)、M(男性が主体の仕事)に分類し、その割合を調べました。

それを見ると、女性の労働の比率が非常に高いのはトウモロコシなど穀物をすりつぶして製粉する仕事です。そのほかにも、水の運搬、調理、ハーブや根菜類・種実の採集、衣服の製作や修繕、肉や魚の保存、土器づくり(私の専門分野です)が、女性がメインとなっている仕事です。

私の恩師である都出比呂志先生(大阪大学名誉教授)は、『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店、一九八九年)を出す前に、女性史関係の講座本(都出比呂志「原始土器と女性—弥生時代の性別分業と婚姻居住規定」『日本女性史』一、女性史総合研究会編、東京大学出版会、一九八二年)で性別分業論について最初に書かれ、マードックのMとM⁻を男性優位労働、–を中間形態、F⁻とFを女性優位労働に分けて、グラフにまとめられました(図1)。

いまそれを見ると、男性優位労働と女性優位労働に目を奪われがちですが、意外に中間形態が多くて、男性がメインでも女性がメインでもない、中間の仕事がそれなりにあるということがわかります。

また、男性優位の比率が七割を超える仕事を見ていくと、金属工芸や武器の製作、狩猟、楽器やボートの製作、採鉱・採石、木材・樹皮や石・骨・角・貝の加工、材木切り出し、家屋建設、耕地開墾といった仕事であることが読み取れます。

これを要約すると、男性優位労働は力仕事が多くて、瞬発的体力あるいは筋肉労働がメインということになります。また、遠隔地に赴く必要のある労働が男性優位労働であるということが、世界史的・人類史的な傾向として読み取れるということが、マードックの研究から導

き出されてきた一つの成果であるとも言えます。

女性の優位労働は、先ほど申しましたように、穀類の製粉、水の運搬、調理、野草・根菜・種子の採集、衣類の製作と修繕、食物の保存管理、土器・織物・敷物・籠・糸・縄の製作です。

中間形態としては、装身具の製作、耕作と植え付け、穀物の手入れと収穫、火おこしと火の管理、荷物運びなど、男女が共同して関わる

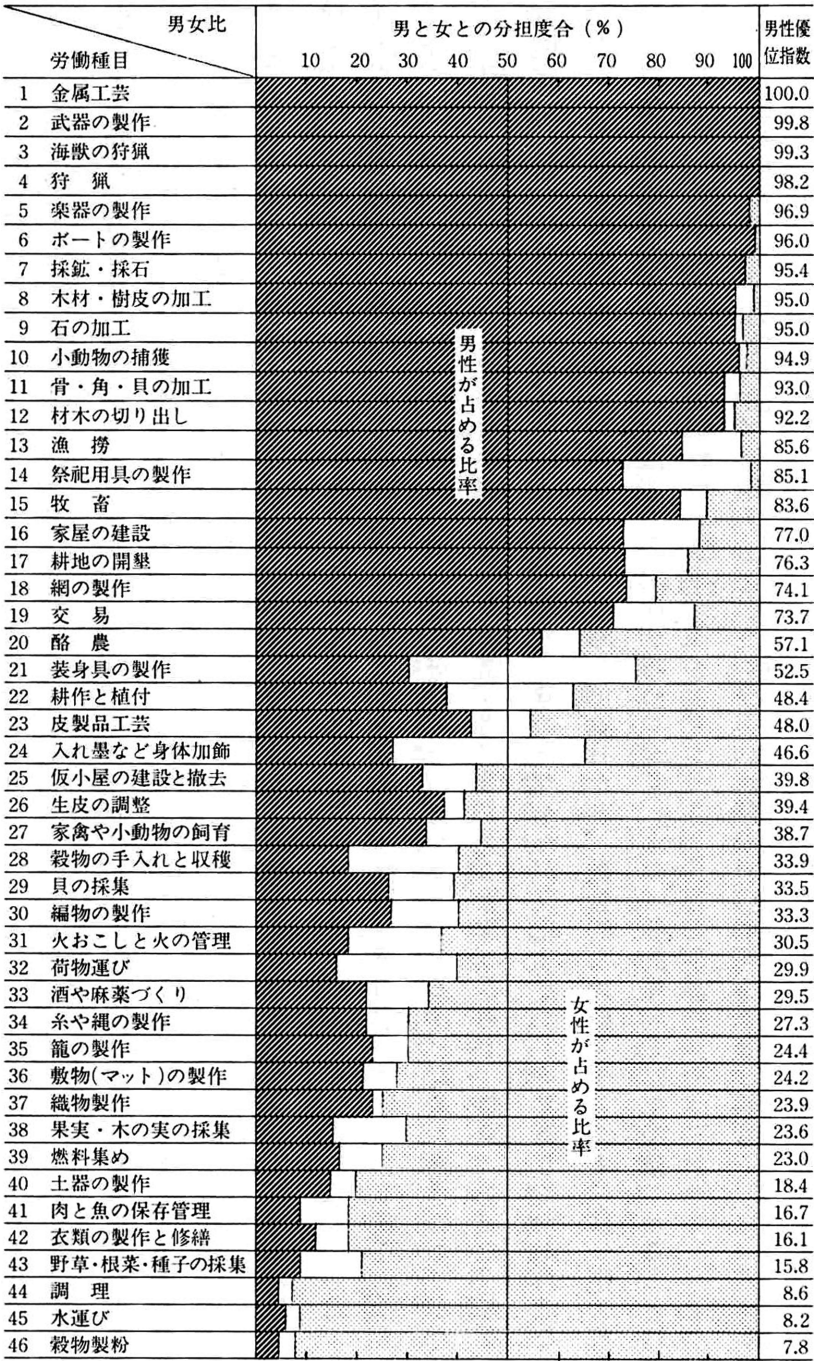


図１　労働の性別分業

（マードックの表のグラフ化、都出1989より転載）

仕事が多いということになります。

こういうお話をしたときに、「みなさんのご家庭ではいかがでしょうか?」とお尋ねすることがあります。しかしながら、機械による労働が存在する社会より以前の、もしくは手工業など機械化が進んでいないような文化の話ですので、現代と比較することはできません。

傾向をみていきますと、女性労働は、衣・食を基軸にしていること、および筋肉労働の要求度が少ない、ということが読み取れます。そして、居住地の近隣で営むことができる労働が多い、というふうにまとめることができるかと思います。

ただし、これは一般的な傾向にすぎません。マードックが集めた内容は、アラスカの人たちの生活と南太平洋の島々に住んでいる人たちを一つにまとめて傾向を導き出しています。暑い地域と寒い地域とか、日本の弥生時代以降のように灌漑で稲作をしている地域とヨーロッパのように天水に頼って農業をしている地域とでは環境がまったく違います。それを一緒にして「こういう傾向がある」というふうに話してしまうと、非常に乱暴な議論になってしまいます。ですから、地域の状況に即して考える必要があるだろうと言えます。

それを古墳時代で考えると、どうなるでしょうか。古墳時代の焼き物は、大きく分けると二種類で、一つは四世紀末頃から中世に至るまで長く使い続けられた須恵器です。これは、土器づくりの中でも基本的に男性が担っただろうと言われる焼き物です。一方、弥生土器の系譜には土師器という焼き物があり、これも古墳時代から最近まで使い続けられてきた焼き物ですが、女性がつくっていたのだろうと考えられています。

「本当にそうなのか」ということについては、私がアメリカ考古学会で話をしたときも、やはり手が挙がって、「それはどうやって証明したのか?」と問われました。正直なところ、古墳時代は史料がありませんが、奈良時代になると木簡などの史料やさまざまな文献から、土師器は女性がつくっていたことが確実にわかります。日本の中世においても、歌や文献や絵図などをみると、女性がつくっていた可能性が非常に高いです。神社の正式な参拝では、土器(かわらけ)で盃をいただくことになりますが、古墳時代の土師器は土器のご先祖さま(と言えば弊害があるかもしれませんが)です。京都では、岩倉に土器をつくっていた女性が一九六〇年代までは確実におられて、その映像も残っています。

少なくとも文献がある時代以降は、女性が製作したものであることが確定していますので、それを少し遡った古墳時代でも、女性がつくった焼き物だろうというふうに私は今のところ理解をしています。

とある女子大学で以前、こうした説明をひとしきりした後、質問用紙を渡して「質問を書いてください」とお願いをしたら、「土器づくりみたいな大変な仕事を女性にやらせるとは、なんたることか」と、学生からお叱りを受けまして、「なるほど」と思いながら聴いていました。先ほど申しましたように、男性が担っていた肉体労働は土器づ

くりよりもっとキツイのです。そういう仕事を男性が担っているということもありますし、焼き物づくりで最も負担がかかる粘土運びや粘土をこねたりする仕事は男性が手伝っていました。

須恵器づくりが男性の仕事だったのかどうかという点は議論がありますが、私は学生時代に須恵器を再現する実験を手伝ったことがあります。須恵器の窯を私の地元の近くに復元して、須恵器を焼き続けました。

須恵器は完成までに一か月くらいかかりますが、土師器は一週間くらいでできます。須恵器の窯は、椎茸を育てるような木を夜通し入れ続けないと窯内の温度が一〇〇〇度を超えません。少しでもサボると九〇〇度くらいに下がってしまいます。ですから、須恵器を焼くときは、山中に入って、少なくとも一週間とか一〇日程度は火をくべ続けないといけないので、男性的な労働としてもよいのではないかと考えているところです。

二つめのお話は、古墳被葬者にみる女性・子ども・家族についてです。古墳時代の研究をリードされているのは岡山大学の清家章さんです。『埋葬からみた古墳時代―女性・親族・王権―』（歴史文化ライブラリー465、吉川弘文館、二〇一八年）という著書の表紙には前方後円墳の写真があります。これは学界では大仙陵古墳あるいは大山古墳と呼ばれていますが、世界遺産では仁徳天皇陵古墳と便宜的に呼称されています。古墳時代というのは、こうした巨大な古墳が築造された時代です。

日本列島の古墳は、他の地域の古墳と異なって、政治の中心地に造られただけではありません。五世紀の百舌鳥・古市古墳群が造られた時代で言えば、きちんと設計された鍵穴形の前方後円墳が岩手県奥州市にある角塚古墳から南九州の横瀬古墳や唐仁大塚古墳など宮崎県や鹿児島県に至るまで、非常に広い範囲で共有されていて、とてもおもしろいところです。

鍵穴形の古墳のうち、一番大きいのは大仙陵古墳の長さ四八六ｍです。宮内庁が最近、大仙陵古墳墳丘本体と内側の堤の間の水がたまっているところ（周濠）をボートで潜水したら、水の下に墳丘の裾が潜っていることがわかってきました。そうすると、墳丘の長さは五二五ｍぐらいになります。築造には一六・八年以上がかかりました。

一方、小さい古墳は一〇ｍにも満たないぐらいです。頑張れば一週間で築造できそうな…というのは言い過ぎかもしれませんが、一か月もかからずに造れるようなものが、巨大な前方後円墳と同じ時代に造られています。

そういうことを考えると、相当な格差がある時代だということで、縄文人が聞いたら「絶対にそんな時代に行きたくない」と言うのではないかと思います。

熊本県の向野田古墳から出土した人骨が同じ清家章さんの本の表紙に載っています。古人骨から男性か女性かを調べた研究者が九州大学におられた田中良之さん（故人）です。田中先生が先鞭をつけられた研究は、データが九州と中国・四国地域に偏っていたということで、近畿地域の事例を追加されたのが清家章さんです。

この研究でわかってきたことは概ね四つです。

一つは、古墳に葬られたのはどんな人かということです。田中良之さんが研究をはじめられる九〇年代より前は、基本的に男性だろうと考えられていました。「男性だろう」と、イメージで考えられていたところが少なくなかったのです。

しかし、出土人骨をしっかりと検討すると、ある古墳では三〇代の華奢な感じの女性とわかる骨が出てきました。先ほど、古墳は五〇〇mを超えるものから一〇m程度のものまであると申し上げましたが、その地域の中で最も大きい古墳に女性の被葬者がいたわけです。

大仙陵古墳にしても、一人だけが埋葬されているのではありません。大仙陵古墳は、前方部に埋葬施設があります。古墳前期も含め、前方後円墳で、複数の埋葬施設をもつ古墳があります。そうした古墳のなかでも「この人(学界では第一主体とか中心主体と言います)を葬るために造った古墳である」ということが、発掘をするとわかってきまして、そこに女性が埋葬されていることもわかってきています。

人骨は、いろいろな情報がわかって、最近では、どこで生まれ育ったか、どういう病気があったかなどがわかります。こういう仕事をしていますし、私自身も数々の人骨を掘ってきましたが、私は絶対に掘り出されたくないなと思っています。

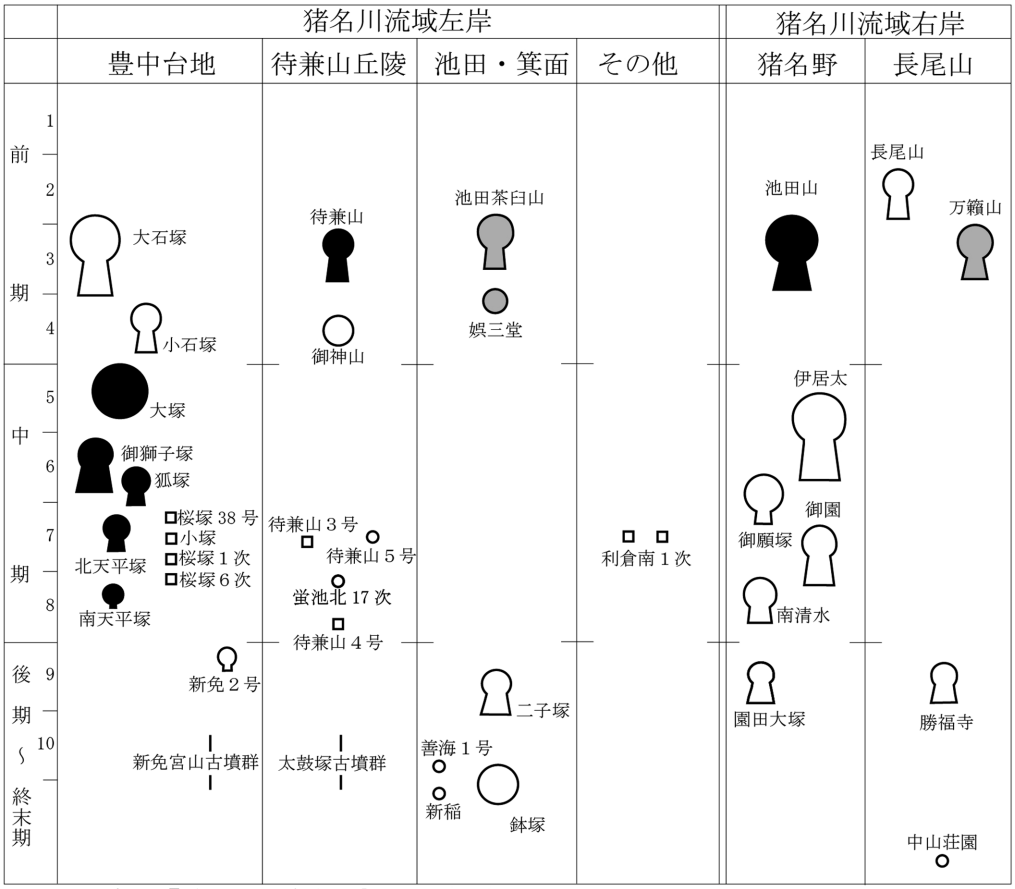
人骨の分析を通して、女性の首長は妊娠の痕跡があることがわかってきています。妊娠中期をこえると骨盤にその痕跡が残るのですが、それが人骨に認められるわけです。

女性首長論は、日本古代史や考古学にはいわゆる「中継ぎ論」があって、男性の皇位継承者に有力候補がいないので中継ぎとして女性が立つという議論があるのですが、その場合の女性は基本的に結婚ができなくなるとか、子どもをつくることが望まれていなかったりします。しかし、古墳時代に関して言えば、女性首長には妊娠の痕跡があるので、確実に子どもが生まれています。これは、女性首長から生まれた子どもたちがその地位を継承する可能性が十分にあったと考えることができます。

埋葬人骨は、二つ並んで出ることがけっこうあるので、現代的な感覚からすると「これは夫婦だろう」と考えますし、中国王朝の漢代やその後の東晋代のお墓は基本的に夫婦がセットで葬られています。ですから、日本でも「夫婦だろう」とずっと考えられていたのですが、調べてみると、じつはキョウダイだということがわかっています。

キョウダイと片仮名で書くのは、兄弟の場合もありますし、姉弟の場合もありますし、姉妹の場合もあるからで、「キョウダイ原理」と言ったりします。基本的に、そういったキョウダイが埋葬施設に入っていることになります。

次に、父系化の話をします。大阪府の豊中市、池田市、兵庫県の尼崎市、川西市、宝塚市の地域には猪名川という河川が流れていて、この川のどの地域で、どの時期、どの大きさ、どの形の古墳が造られたのかを表に並べて、当時の政治的な勢力関係を把握する研究が「首長系譜論」という議論としてあります。お示しした表の中で、前期とい



左列数字は『前方後円墳集成』編年（広瀬 1992）の時期を示す．

■ 初葬に鏃・甲冑・鍬形石いずれかあり（男性の可能性が高い）
□ 初葬に鏃・甲冑・鍬形石いずれもなし（女性の可能性が高い）
□ 初葬の内容不明．時期不確定の古墳も含む．

図２　猪名川流域の古墳編年

（清家2018より転載、一部改変）

うのは三世紀半ばから四世紀半ば頃、中期は四世紀半ばから五世紀（百舌鳥・古市古墳群が築造された時期）、後期は今城塚古墳などが築造された時期です。

なぜ猪名川周辺の話をするのかと言いますと、私自身が二〇一八年まで発掘をしていて、身近な地域だからです（図２）。

五世紀になると男性の被葬者が増えますが、四世紀の段階では池田茶臼山古墳や万籟山（ばんらいさん）古墳は女性被葬者があっただろうと考えられます。骨は出土していませんが、武器を遺骸の近くに副葬するのは男性被葬者の傾向が強いです。人骨の出土例と副葬品のセットの関係を見ると、刀剣類を棺内に収めているのは男性被葬者である確率が高いのです。

腕輪形石製品は、性別を推定するよい手がかりとなります。腕に着けていた事例は少ないですが、このうち車輪石と貝輪のような石製品を持っていて、腕のところに配置している事例は

女性の可能性が高いことがわかっています。同じ腕輪形石製品でも、鍬形石を持っている場合は男性の可能性が非常に高くなります。このような傾向からすると、古墳時代前期の段階では女性首長が地域の中に半々ぐらいいたことになります。

状況が変わるのは五世紀でして、古墳を造っている地域と造っていない地域がけっこう色分けされ、古墳を造っている地域に男性の首長が埋葬されるようになります。特に豊中大塚古墳や御獅子塚古墳は、埋葬者が三体あります。全員男性です。副葬品が武器中心であることを踏まえて、清家さんは、「五世紀という時代は東アジアの軍事的緊張が高まるので、社会全体としては父系化が進んだとは言えないけれども、古墳の被葬者になるような人として男性がゆるやかに選別されていくようなあり方がうかがえるのではないか」という見解を出されています。

子どもの埋葬出土が古墳の中にあるのかというと、古墳の埋葬施設の中は、確実に小さな子どもが埋葬されていたケースはあまり想定されていないところもあって、そういうなかでも注目されているのが土器棺です。

土器棺は、その名のとおり土器の棺で、縄文時代からありますが、百舌鳥・古市古墳群の時代になると、胴の長い棺と少し丸みを帯びた土器が口を合わせるような形で顕出される事例が増えてきます。土器棺は、中西常雄さんが一生懸命に集められ、おそらく胎児を含む子どもが埋葬された棺であろうと考えておられます(中西常雄、「近畿地方土器棺の基礎的研究―5～8世紀―」『古文化談叢』第72集　九州古文化研究会、二〇一四年)。

古墳時代は、基本的に火葬の風習がありませんので、遺骸を火葬せずに埋めるのですが、出土人骨のデータ等から考えると、一六歳の男性の平均身長は一五八・四cmくらい、一六歳の女性は一五〇・四cmくらいになります。肩幅は、一六歳の男性が三四・六cm程度、女性は三四・四cm程度ということがわかっています。土器棺の縁の部分は三〇cmくらいしかないので、一六歳以上になるともう入らない。そこから中西さんは、被葬者は子どもだろうと考えているわけです。

土器棺となった土器そのものに注目してみます。ある事例では、土器棺は日本列島在来の煮炊きをする甕で、胴が少し長くなっています。百舌鳥・古市古墳群が造られた時代は、カマドが入ってきて、カマドでの調理がはじまる時代ですので、カマドで用いられるような胴の長いものになります。朝鮮半島に由来するものと合わさって一つの棺になっている事例もあります。古代有力豪族の葛城氏の基盤になった南郷遺跡群から出ています。そこには在来の集団だけでなく、朝鮮半島からやって来た渡来人が住んでいたことが確実になっています。

ここからが想像が膨らむところですが、朝鮮半島にルーツを持つような土器と日本列島在来にルーツを持つ土器が合わさっているというのは、朝鮮半島から来た渡来人が日本列島に定住し始めて、在来の人と婚姻関係を結び、子どもが生まれ、残念ながらその子が亡くなって、その棺をつくるときに両方のルーツがあるようなものを使ったのではないかと、私などは考えています。

また、土器の口を合わせて埋納すること自体は、日本列島だけでなく、朝鮮半島の三国時代にもみられることです。日本は前方後円墳を造り、百済のほうは積石墓など石を積んだような四角い墓を造り、新羅は木槨を設けて、まずそこを石でパックした上に土を盛るという墳丘墓を造ります。大人になったときの墳丘墓は、東アジア、朝鮮半島各地と日本列島とでは大きな違いがありますが、こと子どもの埋納に関しては非常に似通ったところがあるのではないかということを、いま調べているところです。

最後のテーマは、埴輪にあらわれたジェンダーということで、埴輪の話をさせていただこうと思います。話の対象は人物埴輪でして、きょうは大阪府高槻市にある今城塚古墳―真の継体大王陵と考えられていて、私自身もそう考えています―で出土した人物埴輪から問題を考えてみたいと思います。

埴輪というのは、土偶と違って、少し大きくて、今城塚古墳の埴輪は私の背丈ぐらいあるものがありますし、古墳時代前期の埴輪には私の背丈を越えるようなものもあります。基本的に壊されることを想定していないところがあって、古墳の上に並べられています。

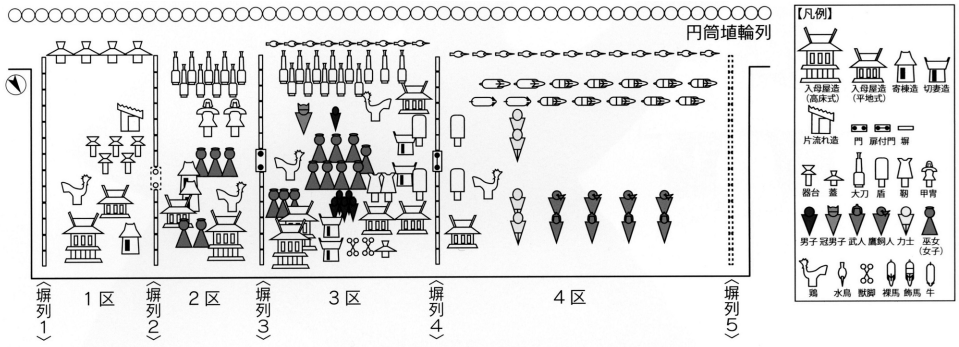
人物埴輪・形象埴輪は、日本の考古学が産声を上げた段階から非常に注目され、研究が行われてきた経緯があります。古くは、どちらかといえば美術史的観点や「太古の人たちはどのような服装をしていたのか」ということに対して研究がなされてきました。

古墳の周りをめぐる埴輪の多くは円筒埴輪（土管のような埴輪）です。円筒埴輪は、たとえば大仙陵古墳では三万本くらい造られていたと試算されています。古墳を調査した際に、あまりにも数が多いので一九七〇年代までは円筒埴輪が出てきてもそのまま埋め戻すような資料でした。しかし、円筒埴輪の表面は板を用いて整えられ、これをハケ目といい、それを見ると年代がわかるのです。いまは二〇年単位で編年できますので、埴輪の研究者は円筒埴輪の欠片を見れば二〇～三〇年単位で年代がわかります。そうすると、陵墓を発掘しなくても、陵墓の周りにある、もしくは宮内庁の管理地外から出土した陵墓に関係する埴輪によって、陵墓の年代がわかるわけです。

逆にいえば、そのために形象埴輪の研究は少し置いていかれて、円筒埴輪にばかり関心を持つようになってしまったのですが、ここ一〇年ぐらい、形象埴輪はジェンダーの観点から見ると非常におもしろいのではないかという研究が出てくるようになりました。

もちろん、人物埴輪は四一〇年から四二〇年頃から出てきて、百舌鳥・古市古墳群が展開していくなかで種類が増えてくるのですが、六世紀の頃になると職業と性別は確実にイメージがつくようになります。たとえば巫女、力士、鷹匠、武人、馬を引く人など、いろいろな埴輪が出てきて、髪型などで性別がきちんと表現されていることがわかってきています。

栃木県の甲塚古墳では、機織りをしている埴輪が見つかっていまして、女性の埴輪だろうと言われていますが、服装など難しいところがあって、少し議論があります。東京学芸大学の日高慎さんはトランスジェンダーとしての表現があるのではないかという見方をされていま



埴輪祭祀場復元図（森田 2011 を改変）

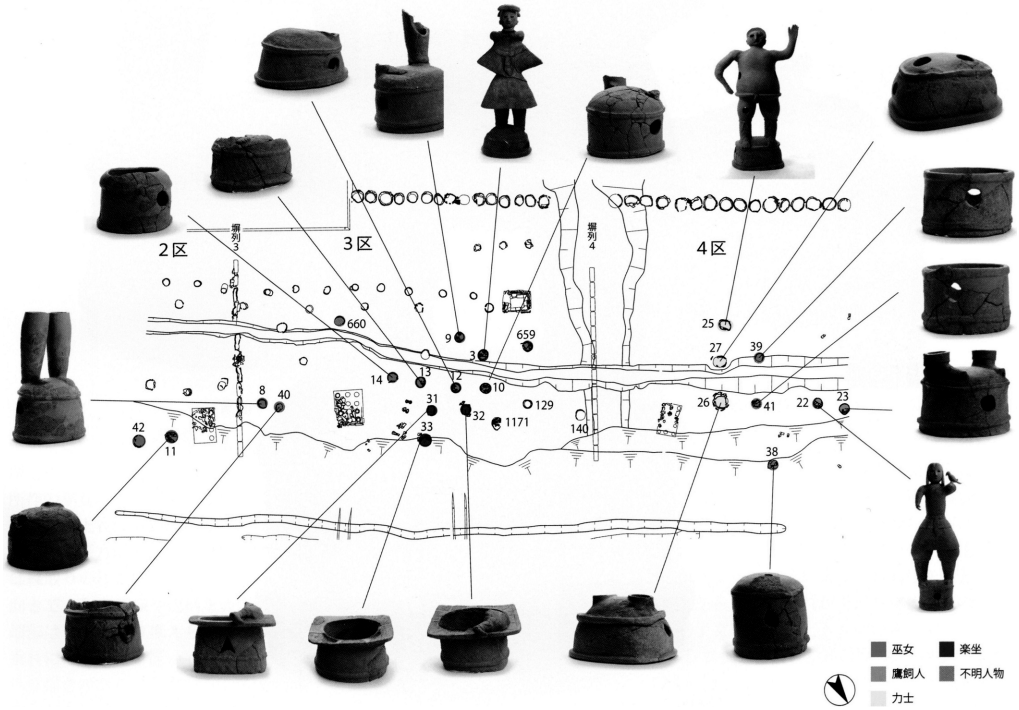


図３　今城塚古墳出土埴輪の配置

（高槻市立今城塚古代歴史館編2016より転載）

す（日高慎「古墳時代の女性像と首長―栃木県下野市甲塚古墳の埴輪をもとにして―」『総合女性史研究』第33号、総合女性史学会、二〇一六年）。こうした埴輪で男女がわかってきているというのが現在の研究の到達段階です。

いま高槻市の今城塚古墳に行っていただくと、史跡整備がされています。墳丘本体から周濠（水が張られているエリア）を越えたところに堤があり、その堤に埴輪祭祀場が再現され、復元された埴輪が並んでいます。人が乗ることができる大きさの埴輪もあって、どこにどの埴輪が置かれていたのかも含めて復元されています。

いま、その埴輪を大学院生と協力しながら調べていて、

男性と女性の置かれていた場所を検討しています。そういった観点から見ると、力士、鷹で狩をしている人、武人、馬などは、埴輪祭祀の一番手前のほうにあります。埴輪祭祀は、一区、二区、三区、四区に分かれていて、亡くなった首長の霊魂が宿っている大きな館などは一区にあり、二区は政務や儀礼に関係する埴輪があり、三区はいろいろな人物がいる世界を表現し、四区はより外側に位置しています（図3、高槻市立今城塚古代歴史館編『王権儀礼に奉仕する人々：平成28年度秋季企画展』、二〇一六年）。

この祭祀場を男女で色分けすると、男性ばかりいる空間と、基本的に女性の空間というふうに分かれることがわかってきています。身の回りの世話をするのは巫女が多いので、巫女は祭祀を司るとか身の回りのことをしていたのではないかと思いますが、そういった女性が内側に配置され、男性は外側に配置されていた、というふうに読み解くことができるのではないかとみています。

こういった埴輪は、当時の職業観のようなもの、もしくは「この職業は基本的にこの性別である」という、ある種のジェンダー規範を反映していることと、そうしたジェンダー規範のなかで、人びとが大王の周りにどのように配置されているのかを読み解くうえで非常に有効な手がかりになるのではないか。そう考えて、丹念に分析しているところです。

私は古墳時代を対象に、今回のテーマにある女性や子ども、家族についてお話をさせていただきました。もちろん、資料的な限界はありますが、こうした考古資料からみていくと、文字には残されていない時代の実像が明確になるかなと思います。

それは現代社会において意味がないかと言うと、そうではありません。現代にある「男だから、こういう仕事に就いたほうが良い」とか「女性だから、こういう役割を担うべきだ」といった、ジェンダー規範や性別分業に関する考え方は、通時代的にそうだったわけではありません。近現代につくられたものも多分にあって、そういうことを批判的に考えるうえでは重要な見方になるのではないかと思います。

考古学の成果は近現代のジェンダー観を絶対視せず、相対的にみて、これからはどういうやり方がいいのかということを、一万年を越えて考えていく手がかりになるということを申し上げて、私の話を終わらせていただきます。

ご清聴いただき、まことにありがとうございました。（拍手）